

# 東寺観智院蔵金剛頂瑜伽中略出念誦経保安四年点について

松本光隆

はじめに

京都東寺観智院には、第十四函第四号として金剛頂瑜伽中略出念誦経四卷が所蔵されている。この資料には、奥書が存して、巻第一には以下の奥書が存する。

(巻第一)

一交了

(朱書)「本円堂點也而後改爲テニハ點

彼付三者東寺大經藏三十帖本了

左點中院本也了

保安四年(一一二二三)四月廿九日傳受了」

(別筆・賢實筆)「寶曆第五乙亥歲(一七五五)五月小盡日修補了

僧正賢實七十三

とある資料で、保安四年の朱の伝受奥書と、宝暦五年の賢賀の修補奥書とが存する。保安四年の奥書には、この金剛頂瑜伽中略出念誦経には、元々は円堂点<sup>ニハ</sup>が加<sup>テ</sup>点<sup>ハ</sup>されていたが、それを後に改めて「テニハ點」を加点したとある。朱書奥書の二行目は解釈には不詳な部があつて、「彼」の指すところが不分明である。仮に以下のような試読の読み下し文を掲げてみる。

○彼の付したる三つ、本は東寺大經藏の三十帖本なり。了んぬ。

文末の「了」は、移点作業が了つた程の意味であろうと理解する。

「三本」とあるのは、この東寺観智院蔵金剛頂瑜伽中略出念誦経加<sup>テ</sup>点<sup>ハ</sup>の三種の

訓点の出自を指すものであると解釈しておく。「東寺大經藏三十帖」も不分明で、三種の訓点の親本が東寺大經藏所蔵の三十帖冊子を出自とするものであるとの謂であろうと解する。

後節に詳しく述べるが、今、保安四年の伝受に使われた当該の金剛頂瑜伽中略出念誦経には親本があつたと思しく、その親本である東寺の三十帖冊子には三種の加<sup>テ</sup>点<sup>ハ</sup>があつて「円堂點」と「テニハ點」とがあり、三種目の訓点<sup>ハ</sup>は、高野山中院の本出自であつて本文左側に加<sup>テ</sup>点<sup>ハ</sup>されていたものであるとの奥書の記載であると解釈しておきたい。

第一節 ヲコト点研究史と東寺観智院蔵金剛頂瑜伽中略出念誦経保安四年点

この東寺観智院蔵金剛頂瑜伽中略出念誦経保安四年点<sup>ハ</sup>は、漢文訓読語史研究史において、夙に中田祝夫博士が「古点本の国語学的研究 総論篇」(昭和二十九年五月、大日本雄弁会講談社)に取り上げられて、東大寺点の呼称として「テニハ點」が使われていることと、円堂点<sup>ハ</sup>を東大寺点<sup>ハ</sup>に改めたと言ふ奥書があることに注意を払われた資料として著名である。

ヲコト点の研究史において、中田祝夫博士は、ご著書「古点本の国語学的研究」の業績によつてそれまでのヲコト点の認識を深め大きく飛躍させられた。訓点資料を博搜されて、ヲコト点の形式とヲコト点の使用者の系統との相関関係を実証的に解明された。この知見は後、各々の訓点資料の言語的性格を推定する際に大

きな手がかりを与えることとなつて研究者に受け入れられてきた。即ち、ある訓点資料の言語の成立環境を問題にしようとする時の手がかりは、奥書や資料に書き入れられた言語主体を限定する情報に求められるが、こうした奥書や書き入れの手がかりのない資料も夥しい数に登るものであつて、これらの情報のない訓点資料であつても、ヲコト点の存在に依つて加点点者の言語環境が推定され位置づけられて漢文訓読語史が論じられ大きな成果を上げてきた。漢文訓読語史研究において共時的に言語の位相を考えようとする場合、その共時体は一般に宗派流派の単位で設定されてきた。共時的な言語集団の単位は、使用言語の質の同じものを持つて設定されるべきであるが、こうした共時的な言語集団単位に宗派流派が設定の基礎となつたのには、宗教史的な影響からの視点での集団設定も大きからうが、中田祝夫博士の構築された研究成果を基としての認識も更に大きく影響していたものと認められる。即ち、ヲコト点と言う表記面での言語要素の類型的類別が、宗派流派に適合することも宗派流派単位の共時的言語集団設定の後押しをし、蓋然性を保証をしたものであらうと認められる。

しかし、ヲコト点の種類に依存しての宗派流派単位の共時的な言語集団の設定は現時点において見直すべき必要性があらうと認められる。これまでの漢文訓読語史研究における宗派流派を基とした言語集団の設定は汎時代的な色彩があつて、宗派流派の歴史性とか宗派の個性や宗派流派に所属する個々人の性格には思考が及ばぬままで、言語集団の設定の妥当性を真剣には顧みられることが少なかつたように思われる。

このような宗派流派単位をそのままスライドさせた共時的な言語集団の設定と言うのは理屈は付けやすいが、極めて単純な発想であり、仏書における宗派流派単位の設定は、漢籍訓読における漢文訓読語の共時的分析が博士家単位で成果を上げて来たと言う研究史に依存して、仏書訓読語の分析にも安直に援用されたものであることは、既に説いたところである。稿者は、漢籍訓読語の実態として、博士家単位での規範的価値観を背負つた訓読語が実現されて居たこと自体を否定した訳では無く、規範的価値観を背負つた訓読語の実現は、漢籍訓読語の一部分の実態であつて、漢籍訓読の全体を覆い尽くしたものでは無いと考えている。平

安鎌倉時代の漢籍訓読は、実は多様な実態があつて、漢籍訓読語史研究における共時的言語集団の単位設定は、今後、漢籍訓読の多様な実態に合わせて多様に設定されて然るべきであると考ええる。

仏書訓読における漢文訓読語の共時的解明を目指しての言語集団の設定が、宗派流派単位が専らで来たのは、旧稿にも説き右にも触れた如く、漢籍訓読における博士家単位での言語集団設定の類推によるもので、かかる言語集団設定の妥当性の論拠としては、仏教の世界における宗派流派単位の仏法の相承が念頭にあつたように思われるし、宗派流派単位の集団は、同一の価値観を共有するもので言語現象においても均質集団であつたと認めて良いと言つた幻想が、客観的であるべき漢文訓読語史研究の世界において殆ど無批判のままに蔓延したからである。しかし、現実問題として、例えば平安時代の台密にしても、東密にしても、密教的価値観は多様な様相を産んだやうで、実に夥しい分派を生成している。このことは、宗派流派と言う僧侶集団内部に多様な価値観を生じていた証であるし、取りも直さず、ことばの多様性を指し示したものであると解釈されて良いのではなからうか。

本稿に取り上げた東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点は、右の宗派流派の単位での共時的言語集団設定に対する反証を提供する実例であると認められる。当該の東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点には、三種の訓点の加點がある。一つは円堂点で、平安時代後半期には真言宗広沢流仁和寺や真言宗高野山、石山寺での使用例が多い。二つ目は東大寺点で、南都や真言宗小野流の寺院、真言宗高野山での使用例が多く知られる。三つ目は中院本——中院僧正点（後述参照）で、主として真言宗高野山で使用された資料が多く知られている。この資料に現れている漢文訓読語を分析対象とする場合、どのようなレベルで共時的な言語集団を設定するかと言う視点から言語集団を仮設して見れば、従来に多く採られた言語集団の設定は、真言宗広沢流、真言宗小野流、真言宗高野山の規模で設定されて分析され始める事が多かつたように考えられる。しかし、そうした設定が妥当であるのか否かの検証が必要とされるべきであらう。

しかし、中田祝夫博士が該当資料に注目されたのは、巻第一の朱書伝受奥書に、

「本円堂點也而後改爲ア二ハ點」とあって、本来最初に加点された訓点、円堂点であったものを、東大寺点に改めたと言う点であった。博士の奥書解釈は、円堂点で加点された訓読語をそのまま東大寺点に移し替えたとは理解されよう。訓読語の言語要素としての構文や文法等は改められることはなく円堂点の訓読表現をそのまま踏襲したもので、ヨコト点と言う表記面を改めたものであったと評価されたものであったと理解される。この解釈は、真言宗広沢流に行われた訓読語が表記面以外はそのまま真言宗小野流に伝えられたものであると理解されて、平安時代後半期における訓読語の伝承についての注目すべき実態の実証的証拠資料と評価されたことになる。中田博士の歴史認識は、平安時代前半期には自由な表現力を持つて展開されていた漢文訓読語が、平安時代後半期に入って一字一句が師資間に伝承されるような謂わば、硬直化した言語表現へと質的变化が起きていたのだとしたものであったと理解される。中田博士は、東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点は、こうした歴史観の実証的証拠資料としての意味合いを見出されると認定評価されたものであろう。

以下、東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点が、真にこうした中田博士の認識を支える資料であるのか否かを節を改めて論じてみたい。

## 第二節 東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点における円堂点の訓読語と東大寺点の訓読語、中院本の訓読語

先ず、本稿に取り上げた東寺観智院藏金剛頂略出念誦經保安四年点の訓点加点状況を、巻第一の奥書と照らし合わせて記述することから始める。

奥書には、「円堂點」の呼称が認められるが、用語が出現する背景には、少なくとも奥書の記載者である保安四年の伝授の受者には、「円堂點」と言う語形に背負われた具体的な実態が認識されていたもので、そうした概念を担った円堂点に対する認識が存した筈である。用語「円堂點」の使用には当時のそうした意味内容を持って奥書に使用されたと考えるべきであろうと判断される。当該資料に加点された円堂点、擦消されたものが主である。例えば、

1、諸の衆生を利(し)三身を得令(めむ)か爲の故(に)(以下略)(巻第一・円堂点、以下円堂点の擦消も右のように表記して一々に注記を施さない)諸の衆生(返)を利し三身を得令(めむ)か爲の、故に(以下略)(巻第一・東大寺点)

2、略して一切如來の所攝の眞實の最勝の秘密(の)「之」法を説(く)(巻第一・円堂点)

略して一切如來の所攝の眞實の最勝の秘密(の)「之」法を説(か)む(巻第一・東大寺点、「説」字左傍二朱仮名「ク」アリ)

などの如くで、例1の初掲例は、資料中に擦消されている円堂点に従つての訓読文で、「諸」「爲」の壺中央「の」、「生」「身」の壺右肩「を」の星点や、「令」の壺右下の線点「か」が擦消されている。例1の後掲例の方は、東大寺点に従つて訓読した用例で、両者の訓読は一致している。

例2の円堂点「して」「の」「を」等のヨコト点は擦消されている。これに対して、用例の後掲の読み下し文の如く、本文には重ねての東大寺点の「して」「の」「を」等の加点が認められる。なお、文末「説」字には、ヨコト点は東大寺点「む」のみの加点があり、左傍には朱仮名「ク」の加点があるが、左傍の仮名「ク」は、奥書によれば、高野山中院関係の訓点と思しい。

この加点状況は、奥書にある記述に符合するものであるが、円堂点の擦消と同一紙面に重ねられた東大寺点の加点状況の実態が問題である。即ち、保安四年の伝授の受者が、当該資料の加点に如何に関わったのが問題となる。そのことは、取りも直さず、保安四年の金剛頂略出念誦經の伝授において、訓読語に関するどのような言語活動があったのかの問題でもある。

金剛頂略出念誦經巻第一の奥書には、円堂点の加点と、東大寺点の加点と、そして、高野山中院流に関わる加点との三種の訓点「が」が記されているが、少なくとも保安四年奥書のある伝授の現場では、この三種の訓点「が」揃って存在していた筈である。加点された訓点に関しての直接の出自の情報が確認されるのは、「東寺大經藏」の記事で、「三十帖本」が関わっていることが知られる。先にも述べた通り、この巻第一の朱書奥書の解釈に臆なところがあつて、当時の具

体的状況をイメージできない憾みがあるのであるが、原本の状況は、先ず円堂点の加点がされてから長い時間を空けて後東大寺点が加点され、更に左傍に高野山中院関係の訓点が順次別人の加点がなされたと言ったものではなくて、後にも触れるが、円堂点と東大寺点の朱点の朱色に濃淡があつて、厳密な意味では時間的には差があるものの、硯が異なるとかの理由が考えられて、本資料の朱の訓点には同一人の手になるとみて矛盾がないので、恐らく、保安四年の伝授の受者が、伝授のために用意した訓点資料であると思し、親本の加点状況を忠実に移写したものであろうと仮定しておきたい。

現存の東寺観智院藏金剛頂略出念誦經保安四年点の円堂点は、擦消されているのであるが、これは、移点時の親本に存した円堂点の擦消をそのまま写し取ったものか、或いは、東大寺点との区別を明確にするために、伝授の受者が加工したものだらうと思われる。一旦加点了した円堂点を擦消するという営為は、一見実に手間のかかる移点作業である。その意図を付度するに、円堂点と東大寺点の二種の訓読を識別しようとする際、擦消の方法に従わなければ、円堂点に庵点を付すとか、東大寺点に合点を付すとかの方法を採ることになるが、全巻に亘って比較的に稠密に加点されている本資料のような場合は実に煩雑な作業となるし、秩序なく入り乱れた状況にもなりかねない。東寺観智院藏金剛頂略出念誦經保安四年点においては、擦消と非擦消の対照によって二種の訓点を識別する方法に従ったのだと見ておきたい。

巻第一の奥書には、円堂点、東大寺点の他に、左傍に付された高野山中院本出自の訓点が存する。右の例2にも少し触れたが、

3、一切如來の大乗無間の法を了知(せ)不(るか)爲(の)故(に)。

(巻第一・円堂点)

一切如來の大乗無間の法を了知(せ)不(る)か爲(の)故(に)

(巻第一・東大寺点)

一切如來(の)大乗無間(の)法(を)了知(せ)不トヲ爲テノ故(に)

(巻第一・中院本、「爲」字左傍朱仮名「モテノ」、「不」字左傍朱仮

名「トヲ」)

右の例3は、初掲例の摺消の円堂点の訓読と次掲例の東大寺点の訓読とは一致した読みがされているが、中院本の加点出自と思しき左傍朱仮名は訓読語が異なる。中院とは訓点資料奥書に見られる多くの例では、中院僧正明算の高野山の住房をさす。奥書にある「中院本」が即、明算の訓読を指すとは言えないが、明算の弟子達も時には、「中院御本」等と記して中院僧正明算の資料をも利用しながら、中院僧正点を使って訓読を行っている。即ち、巻第一奥書の「中院本」は、高野山の中院関係出自の資料であると認めてよからう。中院関係の資料は、梅尾高山寺にも多くが所蔵されているが、仮名点を除いた高野山中院関係資料には、中院僧正点の加点がある。本稿に取り上げた東寺観智院藏金剛頂略出念誦經保安四年点には、積極的に中院僧正点であると認められるヲコト点の加点がない。奥書によって、高野山中院系の訓読が、東寺観智院藏金剛頂略出念誦經保安四年点の左傍に書き入れられているのは確認されるが、この左傍朱仮名に対応するヲコト点を積極的に認められないと言ふのは、加点上の錯綜混乱を避けようとしたものであると解しておきたい。本資料にある加点の系統で、全巻に亘るものは、擦消された円堂点と東大寺点の加点であるが、この二種の識別は擦消であるか否かで区別されている。この東大寺点は、第三群点に属するヲコト点で、高野山中院で使用例の多い中院僧正点も第三群点に属する。東大寺点と中院僧正点とは、星点において壺の周囲の四隅と四辺には等しく左裾隅から時計回りに「テ・ニ・ハ・ヲ・ト・ノ・キ・ミ」の音節が配置されて一致している。星点においての違いは、東大寺点が壺の内側に星点を配しているのに対して、中院僧正点では壺の内側に星点を置いていない。点図集の第二壺以降の線点や鈎点では両者の間で出入りが甚だしい。東大寺点では壺の内側にもヲコト点を配しているが、中院僧正点では基本的に壺の内側には線点や鈎点が配されない。東大寺点の場合の各壺におけるヲコト点の配置は、壺の周囲には、四隅と四辺の中央に置かれているが、中院僧正点においては、各壺の四辺には中央のみではなくて、複数種のヲコト点が配される。例えば、中院僧正点では星点も四隅と四辺の間に置かれているし、線点「一」なども右肩隅から右裾隅まで「へ・スル・ツ・ヨリ・セ」の五つが配されている。東大寺点と中院僧正点のヲコト点の出入りは甚だしいもので

あるが、訓読文が日本語文である以上、中国語文には殆ど現れてこない助詞の類で、一般に「てにをは」と呼ばれる格助詞「に・を・と・の」、接続助詞「て」や係助詞「は」は、訓読文中には読添語として共通に頻出して、この音節に対応するヲコト点の位置が等しい。即ち、東大寺点も中院僧正点も同一紙面上に、同一の朱色の同じ手のヲコト点の加点がなされた場合、極めて錯綜した状況であることが予想される。擦消であるか否かの対照や、色彩の違い、庵点や合点の加点の識別法を用いなければ紛らわしいこと甚だしい。東寺観智院蔵金剛頂瑜伽中略出念誦経保安四年点の加点者が採った中院本の訓読の識別法が仮名点の左傍朱仮名加点であったと推測する。後段にも記すが、東寺観智院蔵金剛頂瑜伽中略出念誦経保安四年点の三種の出自の訓読は、訓読に相互の異なりを見せる。この事は、訓読語における訓読法や語形、語彙語法などの言語的な差を示すものでもあるが、構文の解釈による訓読法の違いや充当和訓の異同は、修法の異同であったり、金剛頂瑜伽中略出念誦経の理解の問題である場合もあって、宗教史的な問題を孕むもので、この点に注意を払うべきであろう。

この東寺観智院蔵金剛頂瑜伽中略出念誦経保安四年点に加点された円堂点と東大寺点との訓読には、円堂点で表現されている訓読語を、そのままの訓読語で東大寺点に表記に移し替えたのではなく、両者には訓読語の異同が存している。

4、身口意相應して歸命して三寶(を)礼(し)たてまつる(巻第一・円堂点)  
身口意の相應をもて歸命して三寶を礼(す)。(巻第一・東大寺点)

右の例では、円堂点の「身口意相應して歸命して」の訓読に対して、東大寺点では「身口意の相應をもて歸命して」とあって、「相應」のサ変動詞による訓読であるか、漢語名詞で訓読するかの違いがある。また、文末の待遇表現についての読添語が異なる。

5、金剛の身と口と意と遍(く)三界には満(てむ)とせむ者は能く自在の主(と)爲(て)金剛界を演説(す)。(巻第一・円堂点)

金剛の身口意、遍く三界に滿せる者能く自在の主(返)と爲て金剛界を演説(し)たまふ。(巻第一・東大寺点)

例5では、「身口意」の読添語の有無が異なり、「滿」字、「者」字の読添語と、

文末の敬語の読み添えが異なる。

6、進力度(を)以(て)三(ひ)之を相繞(せ)よ(巻第一・円堂点)  
進力度(返)を以て三ひ之を相(ひ)繞フ。(巻第一・東大寺点)

例6は、「相繞」の訓読に関わることで、円堂点は漢語サ変命令形に訓読したと思しいが、東大寺点は訓読して「相(ひ)繞フ」と和訓読して終止法を採用する。

左傍には朱仮名「ムコト」があつて、高野山中院本の訓読法を示したものであろう。左傍朱仮名は、円堂点、東大寺点の訓読は例6の文末で終止するところを、高野山中院本はこれに続く「如擊甲狀」に続けて、「進力度(を)以(て)三(ひ)之(を)相繞(せ)ムコト甲(を)擊(つ)狀(の)如(し)」とした訓読を示したものと思われる。

7、觀羽(を)以(て)金剛手に(し)て光焰あり(て)跋折羅を執れ

(巻第一・円堂点)

觀の羽(返)を以て金剛手の光焰ありて跋折羅を執レ「イ、執る」。

(巻第一・東大寺点)

例7の「金剛手」の左傍には、朱仮名「ニシテ」があつて、高野山中院本のこの部分の訓読は、円堂点に等しい。この例7にも、円堂点の訓読と東大寺点の訓読には出入りがあるが、東大寺点の文末には、東大寺点内部に命令法と終止法との異同が存在するものと認められる。

右には、三種の訓点の訓読語の異同を掲げたが、読添語、音訓読、充当和訓、訓読語の構文、文の断続に関わる句読法などの出入りがあることが確認された。今、稿者には、東寺観智院蔵金剛頂瑜伽中略出念誦経保安四年点四巻の全体に亘つての訓読法の異同を計量的に集計して差異の全容を数値に置き換える用意がないが、円堂点と東大寺点と言うヲコト点法の差異は、円堂点の訓読語をそのままに、表記面だけを改めての東大寺点の加点ではなく、訓読語そのものに差異のある状況を示していることは、多くの例を掲げてはいないが、明確な事実として指摘されよう。それに高野山中院本の訓読を加えて観察しても、左傍朱仮名は、円堂点、東大寺点とも異なつた訓読を示しており、この三者の訓読語には表記面だけでは

ない言語としての差異があるものと認められる。

この円堂点と東大寺点、高野山中院本の左傍仮名の加点について、今一度、加点の实情を推定しておく。

8、其の契は觀の羽を以(て)金剛拳を結(ひ)願方便慧と等三度申(へて)即(ち)口を漱(く)應(し) (巻第一・円堂点)

其(の)契觀の羽(返)を以て金剛拳(返)に結(ひ)て願と方便と慧等三度(返)を申(へ)て即(ち)口(を)漱(く)應(し)。 (巻第一・東大寺点)  
の例では、円堂点の平仮名でのヲコト点表示の「其の契は觀の羽を金剛拳を慧と口を」の助詞等のヲコト点は、擦消されていないままで資料中に存在している。後に掲げた東大寺点の訓読とは、「金剛拳」の採る格助詞が「に」となっていて円堂点とは異なり、訓読語上の差異が認められるが、摺り消されないままに残っている円堂点は、東大寺点に比較すれば、その朱色よりも若干濃く見える。しかし、加点主体が異なっていると言う確証は資料内には見出してない。巻第一において、円堂点の擦消は頻繁に出現するが、巻第二以降の巻では、円堂点の加点箇所が、極端に減少する。

9、〔爾〕時(に)世尊文殊師利摩訶菩提薩埵三摩耶所生(の)法加持金剛三摩地に入(り)已(りて)自心從(り)此(の)一切如來大智慧三摩耶の一切如來心(と)名(くるを)出(つ)。即(ち)密語(を)説(く) (巻第二・円堂点)

〔爾〕時に世尊、文殊師利摩訶菩提薩埵の三摩耶の所生の法の加持金剛三摩地に入(り)たまひ、已(りて)自心從(り)、此(の)一切如來の大智慧三摩耶を出(てたま)へり。一切如來心と名(く)。即(ち)密語(を)説(く) (巻第二・東大寺点)

左傍中院本朱仮名は、「三摩耶所生」の「耶」字左傍に「ヨリ」、「大智慧三摩耶名一切如來心」の「耶」字左傍に「ノ」、「名」字左傍に「ルヲ」。

例9は巻第二の巻頭部分であるが、円堂点の擦消は、傍線を施した格助詞「に」と「の」の二箇所のみで、「大智慧三摩耶」の「耶」字への円堂点加点擦消「の」の加点は、東大寺点では「を」の加点があつて両者で構文をことにする。

10、此は是諸の如來の堅牢の金剛縛なり。若(し)一切の印を爲ルに、

速疾に成就(する)か故に三摩耶極(め)て難(け)レトモ羯磨能く超度す。(巻第二・東大寺点)

左傍中院本朱仮名は「難」字左傍に「ヲハ」、「羯磨」の「磨」字左傍に「ヲモテ」。

右の例10は、巻第二中の五字句の偈であるが、東大寺点の加点と、左傍中院本朱仮名の加点はあるが、円堂点の加点は一箇所も存在しない。

11、復(た)次(に)是(の)如(く)、思惟(す)我成等正覺末(た)久(し)から「末」(再讀)して一切如來の普賢(の)「之」(朱右補入)心なり。

(巻第二・東大寺点)「成」字ニヲコト点「よ」アリ  
復(た)次(に)是(の)如(く)、思惟(す)我成等正覺成(ら)ムコト末(た)久(し)から「末」(再讀)シ(て)一切如來(の)普賢(の)「之」(朱右補入)心(なり)ト。(巻第二・左傍朱仮名中院本)

例11は、東大寺点と左傍朱仮名の中院本の読み下し文を掲げたが、擦消のヲコト点は、「末」字の上辺中央に判読できない擦消跡が認められ、「久」字に句点、「一切如來普賢」には「一切如來の普賢」の円堂点の擦消がある。また、文末の「心」字には「と」の加点があるが、「成」字に返読すべき格助詞なのか、右の中院本の訓読の如くに会話末の会話引用の格助詞なのかは不明である。右の例11中に出現する擦消点は、その五ヶ所に留まる。

巻第四は、巻第二、巻第三に比べれば、擦消の円堂点の出現は厚くはあるが、例えば、

12、菩提樹下(に)於(いて)最勝無相の一切智を獲得(す) (巻第四・円堂点)

菩提樹下(返)に於(いて)最勝無相の一切智を獲得(したま)へり。(巻第四・東大寺点)「獲得」字ニ「む」アリ

「獲得」の「得」字左傍に朱仮名「セリ」。  
引用例が短いが、例12に認められる擦消円堂点は、格助詞「の」と「を」とを認めるだけである。

13、即(ち)此の偈の義を思惟(せ)よ。

諸法は影像の如(し) 清淨(にし)て濁穢無(し) 無取の無可の說 因業(の)「エ」所生なり 是(の)如(く)此(の)法を是自性(を)離(れて)依(ること)無(し)と了(りて)無量の衆生(を)利(す) 是如來(の)意より生ず

(卷第四・円堂点)

即(ち)此の偈の義を思惟(待)す。

諸法は影像の如(く)、清淨にして濁穢無(し)。 取る(こと)無(く)、說(く)可(きこと)無(く)、 因業(の)「エ」所生なり。 是(の)如(く)、此(の)法は自性(待)を離(れて)依(ること)無(待)と了(サト)テ無量の衆生を利(す)る、 是 如來(の)意より生ず。

(卷第四・東大寺点)

左傍中院本朱仮名は、「可」字左傍に「コト」、「利」字左傍に「ス」。

例13は、円堂点の加点が比較的厚い箇所であるが、この偈の訓読は、東大寺点の訓読との出入りがあつて、異同箇所を特に示したと解釈して矛盾がない。

かかる状況について巻第一から巻第四の四巻を通覧すると、擦消点である円堂点において巻によつての加点の粗密が存することが理解される。この事は、東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点四巻において予め円堂点が四巻全巻に亘つて密度が均等に加点されて円堂点で読み下しうる体の加点がなされていた訳ではなく、基本となるヲコト点は東大寺点で、この東大寺点と異なる訓読箇所を中心にして一度円堂点を加点して、それを擦消して東大寺点との訓読語の差を示すそうとしたものであると考へて矛盾がない。巻々によつての加点方針には揺れがあつたと考へても良からう。即ち、巻第一では円堂点も東大寺点も母念に加点されているが、巻第二・巻第三では円堂点は比較的粗で、東大寺点との異同箇所にみに集中し、巻第四では、異同箇所が多出とかの理由でか円堂点の加点が厚くなされている。

間接的にはあるが、保安四年の伝授の状況を、以上の分析から推測すれば、伝授の話題となつたのは、円堂点の訓読語と東大寺点の訓読語と、そして副次的

な加点状況と言ふべきであるが、高野山中院流の訓読とが対照されて行われたと見てよからう。かかる三流の違いの伝授が行われる、そのための準備として作り上げられた訓点資料が、東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点四巻であると見ておきたい。

ことばの問題としては、一つの場合で、三種の系統のことばが問題とされて実現されたものであると考へられて、そうした言語の場の生成は、所謂、宗派流派のことばが単純に単流として展開されたものではなくて、混淆して一つの言語場場で表現され、受け継がれていった現実を理解した上で、言語の享受とか伝承、改変の問題の腑分けをする必要があると言ふことであろう。即ち、一時代の言語の共時態における訓読語分析のための共時体の設定には、従来の安直な宗派流派の単位の発想を捨てて、実状の分析を基に根底から考へ直して見る必要があると思われる。

第三節 東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点における「円堂点」、「テニハ点」等の概念

現在の漢文訓読史研究における「円堂点」や「東大寺点」、「中院僧正点」の用語の示す概念としては、専ら、表記たるヲコト点を指し示すもので、言語の表記上の問題に限られてるように認められる。即ち、円堂点と言へば、第五群点に所属するヲコト点で、点図集等では第一壺星点の配列が左裾隅から時計回りに左上隅、右上隅、右裾隅順に「テニハ」と配列された形式のヲコト点のことを言う。また、線点のそれぞれが、第二壺の左裾隅から左辺中央、左肩隅、上辺中央以下時計回りに「カ・ミ・ナ・ツ・キ・ク・レ・フ・ル・メ・リ・ウ・ネ・ヒ・ヤ・マ・チ・ヨ・ヘ・ム・コ・ト・モ・エ・ソ・イ・タ・ラ・セ・ヌ・イ・ケ・サ・ス・ホ」と線点一つに一音節づつが配当された形式のヲコト点を指す。音節と対応した符号体系の種類の一つの呼称で、文字に準じた表記の概念で使用されている。

本稿の最初に掲げた東寺観智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点巻第一の奥書には、「円堂点」「テニハ点」と「中院本」の呼称が現れる。再度、巻第一の

奥書の一部分を引用する。

(朱書)「本円堂點也而後改爲テニハ點

彼付三本者東寺大經藏三十帖本了

左點中院本也了

保安四年四月廿九日傳受了了

「円堂點」「テニハ點」「左點」中院本の三語は意味論的には類義語として使用されていると思しい。諄くなるが、円堂點は、テニハ點に改められたもので、これと同じレベルの概念の語として、中院本が現れる。かかる類義関係は、現代的な漢文訓読語史研究で使用されている用語の概念では律しきれないのであって、現代的な漢文訓読語史研究の用語の概念を拡張して理解せざるを得ない。即ち、「円堂點」や「テニハ點」とは、表記上の概念だけでは、「中院本」との類義関係の説明が出来ないのであって、「三」と言っているのは、「円堂點」「テニハ點」「中院本」を同列に「點」または「左點」と言っていると解釈しなければ整合性を失う。「中院本(のヲコト点)」と解する余地があるとする論に対しては、東寺觀智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点の左傍に加點されているのは朱仮名で、むしろ中院本の点として指し示すものは実態としては仮名点のことであって、「中院本」に対応するヲコト点の存在の確証は、東寺觀智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点の内部には認められない。即ち、「円堂點」「テニハ點」「左點」中院本」の概念内容は、訓点の意で、表記面は勿論意味として含まれるが、訓読語とか訓読法、更には、訓点によって知られる文脈理解、解釈上の説の意味までを含みこんでいるものと理解しておかなければ、この奥書の解釈が腑に落ちては行かない。

実は、現代の漢文訓読語史研究の術語である、「訓点」や「点」、そして「一(誰々)点」といった場合も意味的存在としては多義的で、表記上での形式としてのヲコト点や文字としての仮名を指し示す場合もあるが、言語表現全体を意味して使われる時もあり、もつと抽象的な觀念も含めて誰々の説といった意味でも使用される。これらの語は、論文中とかの文脈の中で使用される場合、各語の多義性は文脈的意味として限定される。

先に触れた「円堂點」「テニハ點」「左點」中院本」が、この東寺觀智院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經保安四年点を離れて、記述した如く現代語と比較して広い意味で広く使用されていたのか否かについては、多くの用例を収集して意味記述を行う必要があるが、訓点を用いて訓読された訓読語は、形式的言語面だけではなく、その訓読語によって紡がれる内容的觀念や思想性にまで及んでいたもので、思索の筋を示した具体的現物が訓読語だと認識されていたものであろう。

おわりに

漢文訓読語史研究は、所謂言語学的な枠組みに封じ込めて、言語の形式面の觀察に終始して来た嫌いがある。しかし実は、語彙論意味論の分野での思索を深めて行けば、言語を用いて語られる觀念内容や、思想にまで及ばねば、語が実例として使用される文章に即した実証的意味記述は不可能であると言わざるをえない。ある語の意味記述が、蓋然性高く十分に評価できて、記述結果が妥当なものであるという評価を得ためには、仏書訓点資料においては宗教史、思想史的な見に基づく必要があるし、あるいは、語の意味分析を通じて、宗教史、思想史的な知見を深めることにもなる。

現状の漢文訓読語史研究の実状は、ここに記す語彙論意味論の展開に耐えうるだけの資料の蓄積がないと言わねば可いであろう。和文資料については、コーパスの作成が盛んで、大量なる蓄積が構築されつつある。漢文訓読語資料の根本と成る中国古典文については任意情報を付加したコーパスこそ十分には整備されてはいる。中国古典文のようなコーパスを作成するのかを含めて今後の課題であろうが、中国一語であるため膨大資料を対象に一語での検索が可能となっている。

しかし、漢文訓読語史研究者が、宗教史、思想史の知見を深めて語彙論意味論に立ち向かう必要性があるにしても、自ずから限界がある場合が多かる。つまり、言語学的方法を模索しつつ客観性を保持しながら語形の面から語彙論意味論の構築を目指すのが漢文訓読語史研究者の本領ならば、宗教史、思想史的視座

を念頭におきつつ言語学的な論理の筋を通す必要がある。あくまでも客観性を重視した言語学的研究の深まりの先にあるものが、言語主体の観念であり、思想に繋がるものであって、必ずしも観念の有り様や思想の体系的内実を直接的に追いつめるものではない。

かかる深まりを漢文訓読語史研究、特に語彙論意味論に望もうとすれば、漢文訓読語データのプールが、必然的に必要となってくる。漢文訓読語史研究の射程は、和文にも及んで、和文語との比較による漢文訓読語の語彙特性が論じられて来た。和文側のコーパス構築が進んでいる状況において、漢文訓読語史研究の主要資料たる訓点資料コーパス構築を目指すのは、漢文訓読語史研究の深化進展を考えれば、現在の研究のおかれた実情から当然の方向と言えよう。

漢文訓読語史研究に必要な訓点資料コーパスの作成は、第一段階として、訓点資料から総ルビの訓読文を作り上げる事に始まる。第二段階としては、その総ルビの訓読文の単語分割と一語一語に情報を付加した、所謂電子データコーパスの作成となる。

第一段階の総ルビの訓読文作成には、訓点資料の確例たる仮名点加点の語彙情報が必要であるが、現状では如何にも貧弱であるとして評価できない。訓点資料の語彙語形情報は、築島裕博士による「訓点語彙集成」(平成十九年二月〜平成二十一年五月、汲古書院)の刊行があつて、現行の古典語辞書類は、すべて全面的な改定を迫られている。研究史のエポックとなる業績ではあるが、如何せん、語形の表示のみであつて、文脈の支えがない。総ルビの蓋然性の高い訓読文作成には、不十分であつて、「訓点語彙集成」に、文脈を付ける必要がある。漢文訓読語コーパスには、この総ルビの訓読文作成のための文脈付きの語彙収集から行う必要がある。また、よるべき雛形としては、仮名書き本のコーパス作成も参考になろう。

文脈付きの語彙集成を作成した後は、その集成を基に、特定の資料全体の総ルビの訓読文を作成すべきであるが、加点のない字についての充当語形の選別が問題で、この充当語形の蓋然性の検討を行う必要性がある。

第二段階としての問題は、技術的な点に大きな壁があるものと考えられる。つ

まり、訓点資料の訓読文は、研究史の現在において、複雑な組み方をして作り上げるのが慣例的になつている。和文の場合は、漢字平仮名交じり文であるのが普通であるが、訓点資料の訓読文には、漢字、片仮名、平仮名が使われる。記号符種類も複数種使われるし、ルビも施される。総ルビの訓読文には、基本的にすべての漢字にルビが施されて、そのルビにも、片仮名、平仮名、時に、漢字が織り込まれるし、記号符種類も使われる。こうした訓読文の形態を残したままでのコーパス作成には、クリアすべき技術的な面が多かる。根本的には、訓読文の表記法を単純化する必要があるかも知れないが、元の訓点資料の加点の形態を示すためには、付加情報が複雑化する可能性がある。

こうした作業は、一通りでは終わらないだろう。このルーティンの螺旋的繰り返しによつて、漢文訓読語コーパスの精度が増すものと期待される。

漢文訓読語史研究のためのコーパス構築は、完成を見れば、漢文訓読語史の飛躍的発展が期待されるものの、今緒に付いたばかりであると言ふべきで今後のコーパス構築過程においても、生み出すものが多いことが期待される。

#### 注

- 1、拙著『平安鎌倉時代漢文訓読語史解析論』(平成二十九年八月、汲古書院)。
- 2、拙稿「高山寺蔵三教指帰巻中院政期点について」(『高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集昭和六十三年度』昭和六十四年二月)。

#### 〔付記〕

本稿は、平成26年度〜平成29年度 科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号 26370539 「訓点語彙の意味論的研究―文脈付き訓点語彙コーパスの作成―」による研究成果の一部である。記して謝意を表する次第である。